



TITLE:

京大広報 No. 459

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 459. 京大広報 1994, 459: 678-689

ISSUE DATE:

1994-01-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209177>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

# 京大広報

No. 459

京都大学広報委員会



実習人形を使っの学内演習風景 —関連記事本文684ページ—

## 目 次

新年を迎えて	総長 井村 裕 夫……679
＜大学の動き＞	
新年名刺交換会……………680	
外国人教員及び留学生と本学関係者等との懇親会……680	
京都大学市民講座「かかわり」	
講演要旨（その1）……………681	
＜榮譽＞	
辻村公一名譽教授，平場安治名譽教授，宮崎義一	
名譽教授が日本学士院会員に選ばれる……………682	
＜紹介＞	
医療技術短期大学部看護学科……………684	

＜部局の動き＞	
平成5年文学部博物館秋季公開展示……………685	
＜保健コーナー＞	
留学生と食事……………686	
計報……………687	
日誌……………687	
＜随想＞	
応物に思う	名譽教授 内田 洋 一……688
＜コラム＞	
「糸塚」	和 田 修 二……689

## 新 年 を 迎 え て

総 長 井 村 裕 夫

明けましておめでとうございます。新年にあたり、年頭の御挨拶とともに、日頃考えておりますことの一端を述べさせていただきます。

平成5年はわが国が大きい転換期を迎えた年でありました。いわゆる55年体制と呼ばれる政治体制が終わりを告げ、新しい体制へ移行しました。戦後最長と言われる経済不況は現在も持続し、わが国も含めた世界の経済のあり方が一つの転機を迎えているように思われます。そして大学もまた戦後の学制改革に次ぐ第二の大改革の年となり、様々な課題に直面した年でありました。京都大学におきましても、昨年4月に初めての総合人間学部学生を迎え入れ、同時に既存の学部は4年（医学部は6年）一貫教育を始めました。まだ問題点は少なからず残されていますが、新しい学部教育が軌道に乗ったのは、関係の教職員の方々の並々ならぬ御尽力によるものと感謝しております。また法学部の大学院重点化に続いて、工学部、医学部が大学院重点化を発足させましたし、工学部においては学部改革も並行して進行しております。本学における大学改革が、いよいよ軌道に乗った年であったといえましょう。

平成5年はまた久々に施設整備費が増額された年でありました。昭和55年以来大学の施設整備費はその総額が減少しただけでなく、大部分が新構想大学の建設、統合移転の促進、附属病院の改築などにあてられ、既設の大学では著しい老朽化、狭隘化が進行していました。しかし平成5年度の補正予算では、大幅な施設整備費の増額がなされました。京都大学においても懸案の増改築がかなり進行することとなり、いまキャンパスの各所で建設の槌音が高く響いております。この機会に私はキャンパスの美化を進める必要があると考えております。幸いにして本部構内の駐車規制が交通委員会の御尽力により一歩前進しましたので、正門、時計台を持つ本館など歴史的建築物の改修を中心に、キャンパスの整備を進める所存であります。大学の価値はキャンパスの美醜によって決まるものではありませんが、教育、研究の一層の推進のために伝統を感じさせる落ち着いた環境作りが必要であると考えております。

新しい年、本年には百周年記念事業を発足させねばなりません。御承知のように京都大学は明治30年（1887）に設立されましたので、後3年で100周年を迎えることになります。当初の予定では昨年に募金の開始を計画していましたが、経済不況のため一年延期し、かつ規模もある程度縮小せざるを得ないと考えております。百周年記念事業では、記念会館の設立、国際交流を推進するための基金の増額、百年史の編纂、記念シンポジウムの開催などが立案されています。とくに記念シンポジウムには内外の著名な学者を招へいし、21世紀の世界の方向と人類の歩むべき道を討議し、その中から大学の役割、とくに京都大学の次の世紀にとるべき道を模索したいと考えております。この点についていろいろ御意見をお寄せ頂ければ幸いです。

昨年私はアメリカ、ドイツ、オーストリアのいくつかの大学を訪問致しました。またハーバード、スタンフォードの新学長をはじめ、わが国を訪問した多くの学長と懇談する機会を得ました。それらを通じて感じましたことは、いま世界のどの国においても大学が一つの転換期を迎えているということにあります。その内容は、それぞれの国の状況や伝統によって異なりますが、世界全体を通じた「うねり」のような共通の流れも存在します。それらは大学進学人口の増加による大学の大衆化、それに伴う大学の多様化、経済成長の鈍化による大学財政の窮迫、学問のめざましい進歩と学際分野の発展、それに伴う生涯学習の必要性の増加、自己又は外部による大学評価、著しい国際化の進展などです。それらはいずれも大学という組織のあり方に根源的な再構成を迫る大きい課題であります。加えて一層の科学技術の発展と高度の情報化が予想される21世紀が目前に迫っています。いま大学は嵐に揉まれながら航海する帆船にもたとえられるかも知れません。未来という明るい大海原に向けてどのように舵をとる



かが、それぞれの大学にいま求められている課題であります。

本学においても教育、研究の一層の充実のため、独立大学院構想を中心とした将来構想が検討されています。また将来の発展のために新しいキャンパスの必要性も増しております。本年はこれらの懸案を少しでも前進させねばなりません。21世紀を視野に入れながら、世界の大きい「うねり」の中で、京都大学の明るい未来を拓く年にできますよう、皆様方の御指導、御協力をお願い致します。

## <大学の動き>

### 新年名刺交換会

本学恒例の新年名刺交換会が、1月4日（火）午前10時から京大会館において、井村裕夫総長はじめ、奥田東、沢田敏男元総長、西島安則前総長、名誉教授、教職員約250名の出席を得て行われた。

はじめに井村総長から新年の挨拶があり、次いで奥田 東元総長の発声による乾杯ののち歓談、午前11時散会した。



### 外国人教員及び留学生と 本学関係者等との懇親会

平成5年度の「外国人教員及び留学生と本学関係者等との懇親会」が12月17日（金）午後6時から、都ホテルにおいて外国人教員、留学生、教職員及び招待者等約1,000人が出席して開催された。

懇親会は、はじめに井村総長の挨拶があり、続いて万波学生部長の発声による乾杯で始められた。

午後7時頃からのアトラクションでは、インドネシア及び中国の学生による歌唱やフィリピン学生によるバンブーダンス、タイの学生と本学応援団による演武が行われ、盛況のうちに午後8時過ぎ閉会した。



京都大学市民講座「かわり」

講演要旨（その1）

## だれがコンピュータを開発したか？

—機械と理論とのかかわり—

文学部教授 内井 惣七

計算機の歴史はけっこう長い。歴史的に有名なものは、「考える葦」の名文句で有名なパスカルの歯車式計算機である（1642）。これは、歯車の回転を利用して、物理的なメカニズムで計算を行う機械であった。しかし、同じ「計算機」という名で呼ばれても、現代の電子計算機（コンピュータ）が作動する原理は、物理的にも論理的にも歯車式とはまったく違う。

ここで、いったいなぜ「論理的」などという言葉が出てくるのかと不審に思う人がいるかもしれない。二種の計算機の違いといっても、要するに古い計算機は「機械式」で、新しいコンピュータは「電子式」だという違いが本質的なものではなからうか？ ところが、実は、現代のコンピュータと今世紀前半までの機械式の計算機との本質的な違いを理解するためには、論理と計算とのかかわりがある程度把握しなければならないのである。

普通、「世界最初のコンピュータ」として最もよく知られているのは、アメリカのペンシルヴァニア大学で第二次世界大戦中に開発された「エニャック ENIAC (Electronic Numerical Integrator And Calculator)」という巨大な計算機である（真空管が実に18,000本以上！）。この機械は、戦時中のこととあって、アメリカ陸軍の弾道研究所の依頼で大砲の弾の弾道を計算するために開発されたのである。また、この機械で使われた種々のアイデアと技術は、その後の計算機の歴史に大きな影響を及ぼした。ところが、ENIACに関連した特許権に関してその後裁判ざた（スペリー・ランド社対ハニーウェル社）が生じ、その審理の過程で意外な事実が明らかになったのである。エニャック開発の中心人物だったジョン・W・モークリー（1907～1980）は、基本的なアイデアを、ジョン・ヴィンセント・アタナソフ（1903～）と

いう当時アイオワ州立カレッジにいた物理学者から黙って盗用していたのである。「電子的な回路で、論理を応用して計算を行う」という、ENIAC 以後のコンピュータを貫く基本思想は、アタナソフの着想によるものであった。

（平成5年10月23日講演）

## かわりと政治と行政

法学研究科教授 村松 岐夫

かわりはミクロ政治の基本過程である。その積み重なりが政治を動かす。後援会組織もそうして出来ている。選挙は、政策や世界情勢の影響を受けるが、ミクロ政治の結果でもある。かわりは利益で出来ることも人情やイデオロギーで出来ることもある。自民党は、かわりを政治に変換する名人達の集団であったが、ついに政権の座を下りた。優勢政党が、腐敗をきっかけに政権の座を下り、次の時代を予感させている点をイタリアと比較する人も多い。イタリアではキリスト教民主党が地方選挙で決定的な敗北をしたが、イタリア政治の専門家の中にはそのカムバックを予想する人もある。日本の自民党も今なお最大規模の政党である事には変わらないし、政策アジェンダ設定においてはいぜん日本政治を規定する力を持ちそうだ。

政治は「運動」という性格を持ち、イデオロギーなどで結ばれた密度の高い連帯を基礎にしている。これに対して、行政は事態を合理的能率的に処理しようとする。政治と違い、国民的な支持を求めないので、国民とのかかわり合いは極めて弱いものとなる。官僚が依拠するのは国民的支持よりも規則なのである。従来日本では、官僚の支配を指摘してきたが、1960年代の半ばから政党の優位現象が現れた。連立政権は自民党のような優位をもてないようであるが、政党官僚関係の観点からも今後の展開は興味深い。

最後に、今後の日本を考えるとときに重要な論点の指摘をしておきたい。

第一は、有権者構造の変化である。農村票の減少



と新都市中間階層の増大である。さらに選挙制度の改正がある。第二に、政府財政は、高齢化にどのように対処するか。第三に、ポスト冷戦の外交をどうするか。日本の役割が大きくなっている。

(平成5年10月23日講演)

## かかわりの問題としての教育

総合人間学部助教授 岡田 敬司

### I. 近代家族と近代教育

中世には子供期がなかった(アリエス)。近代になって子供を親元にとどめて可愛がり、かつきたえるようになり、これとともに子供期と教育というもののがはっきりとした形をもつようになってきた。つまり教育及びその前提たる子供存在は親子のかかわりの濃密化の産物なのである。

しかしこのようなかかわりの濃密化はいい面ばかりではなかった。中世社会であれば人は幼児期を過ぎると他家で徒弟奉公をやるのが普通であり、半ば一人前に大人達と交わって生きていたのであるが、近代の教育的配慮は子供を家庭と学校に囲いこむことによって、この豊かな社会性を奪ってしまった。可愛いが故の管理、監視が進み、他者とのぶつかり合いの経験の貧困化が進んだ。親、教師が「愛と権威」の権化として他者一般の範形となってしまった。

愛と権威に満ちたかかわりとまなざしが身辺を包んでしまうと、子供の生き方は徹底した従順か爆発的反抗かの二者択一になってしまう。この近代家族と近代教育の産物に対処するには教育環境を物的、自然的側面から豊かにするだけでなく、人的、かかわりの側面からも豊かにして、子供が従順から自立への移行をなめらかにやれるよう配慮する必要があるだろう。

### II. かかわりの教育学

「愛と権威」を一身に体现する親とか教師とかのあり方は近代家族と近代教育がうみ出してきた価値観であり、もともと生身の人間にとって立派すぎるものではなかったか。

親や教師、更には子供仲間のかかわりには本来

多様な作用があり、しかもそのそれぞれが人間形成にプラスに作用し得るのである。例えば教育者と子供との対立葛藤を含んだ関係は、その対立葛藤が一定の枠内におさまるものであれば、意外にも調和的安定的関係以上の人間形成作用をもつことがある。権力的かかわり然り、認知葛藤のかかわり然りである。子供空間、教育空間での人間のかかわりの多様性、多元性の回復こそ急務なのである。

(平成5年10月23日講演)

### <栄誉>

辻村公一名誉教授、平場安治名誉教授、宮崎義一名誉教授が日本学士院会員に選ばれる

このたび、辻村公一名誉教授、平場安治名誉教授及び宮崎義一名誉教授が日本学士院会員に選ばれた。

以下に3氏の略歴、業績等を紹介する。

### 辻 村 公 一 名誉教授



辻村公一名誉教授は浜松市の出身で、昭和21年京都帝国大学文学部哲学科を卒業後、第三高等学校講師、教授を経て、昭和37年より文学部助教授、同42年より同教授となり、はじめ哲学・哲学史第四講座(西洋近世哲学史)、のち同第一講座(哲学)を担当した。昭和60年停年退官し、同61年からは龍谷大学文学部特別任用教授となり平成5年までその任にあった。その間、ドイツ・ブランシュヴァイク学術協会客員会員を務め、また平成5年からはパリに本部を置く国際哲学研究所の正会員にも任ぜられている。

同名誉教授はドイツ哲学研究及び東洋思想特に禅仏教の研究において多年にわたり卓越した業績をあげ、わが国の哲学研究の深化発展に著しい貢献をなすとともに、国際的な哲学界に対しても多

くの寄与をなしてきた。またその優れた研究教育を通じて、今日わが国の学界で活躍している数多くの研究者を指導育成した。

同名誉教授のドイツ哲学研究の中心は、今世紀最大の思想家の一人マルティン・ハイデッガーの思想研究にある。ハイデッガーの思想は西洋の哲学の歴史全体の根本的性格とその今日における問題性とを問うというその包括性及び徹底性のゆえに、今世紀の哲学のみならずあらゆる文化に深甚な影響を与えたのであるが、同時にその徹底した思索態度は容易な解釈を拒む難解さをも伴っている。同名誉教授は第一高等学校在学時にこの難解な思想に接して以来一貫してその厳密な解釈に従事し、特にフライブルク大学での在外研究の折りにハイデッガー教授の直接指導を受けることを通じて、わが国を代表するハイデッガー研究を生み出すことになった。その研究の主たる成果はハイデッガーの名著『有と時』の邦訳、邦語版『ハイデッガー全集』の編集及び研究書『ハイデッガー論攷』、『ハイデッガーの思索』等に示されている。

さらに、ハイデッガー研究とならぶもう一つの主要な研究として、ドイツ観念論の哲学に関する研究がある。フィヒテ、シェリング、ヘーゲルを代表とするドイツ観念論は西洋哲学史のなかでもとりわけ異彩を放つ思想的高峰であるが、同名誉教授の研究はこの領域においても、ドイツ観念論の運動を動機づけた根本的問題意識を析出するというしかたで、その思想の生成の現場に肉迫しようとする視点の下になされている。この分野における研究は現在『ドイツ観念論断想』と題された二巻の論文集に編集され刊行中である。

このように同名誉教授のドイツ哲学研究はドイツ近代と現代の思想史上の最も枢要な成果をその根本から理解しようとしたものであるが、しかしその目標は単なる思想史的解釈にあったのではない。むしろ、これらの厳密な解釈の上に立って、これと東洋的思想との対話及び対決を試みようとするところにその研究の眼目は置かれている。特に禅仏教思想に関する永年の研究にもとづく洞察は、以上のドイツ哲学研究のうちにもすでに縦横に生かされており、それゆえにその研究は国際的にも高い評価をもって迎えられている。同名誉教

授は現在この東洋思想と現代西洋文明との対決を通じた総合の可能性を巡る新たな研究を構想中であるが、その完成は現代における真の東西理解に資するものとして、強く待望されているところである。

(文学部)

## 平 場 安 治 名誉教授



平場安治名誉教授は、大阪市出身、昭和15年京都帝国大学法学部を卒業、直ちに同学部助手に任ぜられたが、まもなく兵役につかれた。昭和21年助手に復帰、翌年助教授、同29年教授に昇任、同45年から47年まで法学部長の任につかれ、同52年に退官されて、愛知県立大学学長などを務められた。本学では、30年にわたり刑法・刑事訴訟法を講ぜられるとともに、少年法をも含めた刑事法の全般について多数の研究業績を発表され、斯界の発展に多大の貢献をされた。また、これらの活動により、学界・法曹界で活躍している多くの人材を指導育成された。

同名誉教授の学問的業績は、ひろく刑事法全般に及んでいる。その特徴は、人間の行為についての深い洞察に基づいて、これを統制しようとする刑事司法制度の適正妥当なあり方を根源的・全体的視野から追求したところにある。実体刑法の分野では、いわゆる目的的行为論を基本としながら、それを超えた理論体系の構築を目指して、同理論を基礎としたわが国初の体系書『刑法総論講義』を著されたほか、学位論文「刑法における行為概念の研究」において、犯罪概念の基礎をなす人間の行為の概念について透徹した分析を加えられた。その後も、刑法規範の構造分析、刑事責任の本質の解明に関わる多くの論文を発表されている。刑事訴訟法の分野では、戦後導入された英米法の人権保障思想を一方的に強調するのではなく、常に実体的真実主義との調和に配慮し、理論的分析の深さと結論の具体的妥当性への配慮を兼ね備えた奥行き深い理論を展開された。著書に



は、『刑事訴訟法講義』、『刑事訴訟法の基本問題』、『註解刑事訴訟法・全三巻』などがある。さらに、少年法の分野においても、処遇理念の強調に終わることなく、法的視点の重要性を明らかにした重要な学問的研究である著書『少年法』がある。

以上に加えて、同名誉教授は、昭和50年から54年までの日本刑法学会理事長を務めるなど、戦後の刑事法学の発展に大きな貢献をされている。

(法学研究科・法学部)

### 宮崎義一 名誉教授



宮崎義一名誉教授は、神奈川県出身、昭和18年東京商科大学卒業、横浜国立大学教授を経て、昭和50年京都大学経済研究所教授に就任、同55年から58年まで所長の任に就かれ、同58年退官後は、東京経済大学教授に転じ、平成元年

から明治学院大学教授、同4年から立命館大学客員教授となり、現在に至っている。なお平成2年には功績により京都大学名誉教授の称号を授与された。

この間、理論・計量経済学会、経済理論学会、経済学史学会の理事・幹事の他、統計審議会専門委員、関税率審議会委員等、政府機関の委員を歴任、昭和63年には第14期日本学術会議会員に選出された。

同名誉教授は、これまでに学術著書（単著）17冊、論文106点、翻訳18点等、驚嘆すべき研究成果を世に問うてきた。その研究領域は極めて広く、ケインズ研究、ケインズ以後の近代経済学説史、日本の企業集団分析、多国籍企業論、世界経済論、日本経済論、現代中国経済論に及んでいるが、いずれの分野においても、独創的で重厚かつ先駆的な研究によって注目されてきた第一級の学者であり、学界はもとより、時には社会に大きな影響を与えてきた。

同名誉教授の研究史は次のように要約できよう。教授は、1967年刊行の『近代経済学の史的展

開』以来、従来の一国資本主義分析中心の現代資本主義論の限界に着目し、現代資本主義像が、1950年代末以降のドル危機、経済統合の進展、アメリカ経済の後退、多国籍企業の生成とその世界化、南北問題の深刻化、日本経済の成長等によって変貌しつつあることを認識し、これらの現実を包括的に体系化する新しい世界経済論の構築を目指し、考察分析を一貫して深めてきた。70年『資本は国境を越える』で多国籍企業を分析し、74年『現代の日本企業を考える』において日本企業の東南アジア進出の問題点を明らかにし、更に82年『現代資本主義と多国籍企業』によって、世界経済における多国籍企業の行動と論理を体系的に研究し、86年『世界経済をどう見るか』において、石油危機後の世界経済を分析展望できる新しい枠組を樹立した。また88年『ドルと円』では、1980年代の金融自由化によって顕著になった資金の流れのグローバリゼーションに光を当てて、カネの流れがモノの経済と並んで、あるいはそれ以上に世界経済の推進力として重要性を高めている最近年の現実を解明した。そして以上の「新たな世界経済論」の有効性を実証するために、分析のメスを加えたのが92年の話題作『複合不況』にはかない。

(経済研究所)

### <紹介>

#### 医療技術短期大学部看護学科

医療関連職従事者の質的向上を期待する社会的要請を背景に、昭和50年（1975）4月22日、京都大学に医療技術短期大学部が併設された。同年に開設されたのは看護学科、専攻科助産学特別専攻である。翌51年には、衛生技術学科が発足した。さらに、昭和57年には心身障害者の社会復帰（リハビリテーション）を支援する理学療法と作業療法の2学科が新設され今日に至っている。現在、本学部の人的構成は、学生総定員500名、一般教育と4学科1専攻（計6部門）の専任教官54名である。そのうち、看護学科は学生240名、看護学



科専任教官15名（教授，助教授，助手，各5名）である。

看護学科の濫觴は遠く明治32年設置の京都帝国大学医科大学附属医院看護婦見習講習科に遡る。爾来，連綿と看護教育は継続され，昭和63年には京大病院看護部はじめ各界の御協力を得て，京都大学看護教育90周年記念式典を挙行了した。

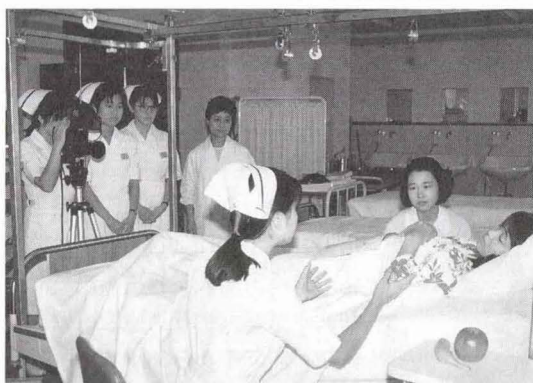
明治，大正，昭和の各時代を通じて，看護職に期待されてきたのは，主に医療の補助的業務であった。平成の現在，看護職には健康障害時とその回復期はもとより，生老病死の全ての段階における生活上の全人格的援助が求められるようになっている。本短期大学部看護学科では，開学当初より，豊かな人間性の涵養と看護の基本的知識・技術の習得を看護教育の目標に掲げ，すでに育成した看護職は千名を超える。

例年，卒業生の約60％は医療機関に就職し，残りの40％は保健婦，助産婦等の養成校或いは看護関係の大学に進む。景気の低迷から，女子の大学・短大新卒者の就職率低下が社会問題になっている昨今でも，看護学科への求人数は数千を下ら

ぬ盛況を呈している。

近年，医療技術の高度化，人口の高齢化と18歳人口の減少，高学歴化等の社会情勢の変化に対応して，看護職をはじめとする医療関連職種教育機関の大学化が急速に進行している。その目的は，各職種の学問的基盤を確立，発展させ，それによって医療全体の質的向上を図ることにある。京都大学においても，医学部を中心に医療技術短期大学部の4年制化構想が検討されつつある。

（医療技術短期大学部）



成人看護実習

## <部局の動き>

### 平成5年文学部博物館秋季公開展示

文学部博物館では，12月18日（土）で平成5年秋季公開展示を終了した。

展示内容，入館者数は次のとおりである。

また，本公開展示にあわせ，10月30日から11月27日までの間4回にわたり土曜日の午後公開講座「古文書セミナーⅥ」を開催した。

期 間	展 示 の 名 称	入 館 者 数				
		一 般	学 生	職 員	特別観覧	計
10/26 }	伊 勢 神 官 文 書 の 世 界	898	382	290	772	2,342
12/18	日 本 の 古 文 書 日本古代文化の展開と東アジア					

（特別観覧とは学術研究，視察その他博物館運営研究及び施設見学等である。）

## &lt;保健コーナー&gt;

## 留学生と食事

国際化が進むにつれて、全国の大学で、年々留学生の数が増加している。本学においても1992年11月現在、873名が在籍しており、今後ますます増加していくものと予想される。しかし、留学生が日本の食習慣や食文化のちがいにとまどったり、困っているのかどうか、その実態を調査した報告は少ない。

今回、留学生の食生活に関するアンケート調査を行い、いろいろ有益なデータが得られたのでその一部を紹介したい。調査は1992年12月から1993年2月の3か月間にわたり、本学の留学生873名のうちの約半数に調査票を手渡し、うち218名から回答が得られた。

回答者の内訳を国別にみるとアジア圏が80.7%と圧倒的に多く、そのうち中国、韓国が3分の2を占めていた。また単身者が52.3%とほぼ半数であった。男女別では男性が83%と大半を占めていた。滞在年数は最短で3か月、最長で11年で、平均3年であった。留学費用別にみると、日本政府奨学金による留学生が約2分の1、私費留学生が約3分の1であった。

1か月の留学費用は、日本政府奨学金では平均195,200円、母国奨学生では平均166,500円、私費留学生では平均101,300円と、明らかに差異がみられた。

ここでは多くのアンケート項目の内から、母国での食生活と日本での食事の状況に焦点を合わせて比較してみた。

朝食の摂取状況を見ると母国にいた時と比べて摂取率が著しく低下している。毎日食べている者の割合は、日本へ来て平均17%も低下しており、特に中国、タイの学生では20%~30%も低下していた。

また、食品別の摂取状況についてみると基本的な食品、すなわち緑黄色野菜、淡色野菜、牛乳、魚、肉類、卵、大豆製品、海藻類、芋類、果物などの摂取状況は、ほとんどの食品で「毎日食べる」という者の割合が低下しており、特に野菜、中でも緑黄色野菜の摂取が著しく減っていた。

以上のような食生活変化の要因について留学

生のアンケートをもとに分析したところ、次の4つの要因が浮かび上がってきた。

## (1) 生活習慣の変化

母国よりも勉強等が忙しくなったために、朝食を食べる時間がなかったり、外食が増加した。

## (2) 経済的理由

日本の物価が高く、なかでも野菜の値段が高いために摂取回数の低下を招いている。

欧米からの留学生にとっては肉が高いために、食べる頻度が低下した者が多い。

## (3) 食習慣の違い

日本では母国に比べ食品の種類が豊富で、特に海産物を多く摂取する習慣があるので、魚、海藻類を多く食べるようになった。また牛乳の摂取回数も増加しているなど全般的に日本の食習慣への適応を図っていることがうかがえるが、味付け、特に味が薄いことや、刺身など、なま物を食べる習慣には慣れにくいようである。

## (4) 宗教上の理由

一部の学生では、宗教上の理由から日本の食習慣に合わせるができないでいる。たとえば宗教上の理由で禁じられている豚肉が日本では色々な料理に使用されており、さらには食習慣や料理法の違いから、豚肉がどの料理に使用されているかわからないために、食品の選択幅が狭まった結果として肉類全体の摂取率が低下している。

以上のような食生活に関わる文化の違いに対して、今後の国際化時代に対応するためにはできるだけ考慮していくことが望ましいと思われる。既に京大生協食堂では1983年以来、メニューのローマ字併記と、肉料理に関しては肉の種類を絵で表示することを行っており、特に絵の表示は、宗教上の理由などで食べてはいけない肉を使用している料理を知りたいという留学生からの要望に応えたもので大変好評である。今後、学内食堂や学外食堂において、留学生が利用しやすい、メニューや表示方法の工夫が望まれる。またいろいろな食品の選択ができるように、副食単品での提供などが必要と思われる。バランスのとれた食事は健康保持の基本である。留学生が健やかに勉学できるように配慮していくことは大切なことである。

(学生部厚生課 長谷川滋子)

## 訃 報

## 藤 中 雄 三 名誉教授

本学名誉教授 藤中雄三 先生は、12月19日逝去された。享年66。

先生は、昭和26年3月京都大学工学部鉱山学科を卒業後、本学助手、助教授を経て同55年4月工学部教授に就任、平成2年3月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後は、福井工業大学教授を務められた。

この間、鉱山学、資源工学の教育と研究に尽力されるとともに、学外にあっては、日本鉱業会や非破壊検査協会などにおいて要職を務められた。国際交流の方面では、特に中国から招待されて同国の関連専門分野の発展に尽力されるとともに、多くの学者を招聘し、留学生を受け入れて、学术交流のみに止まらず国際親善に大いに貢献された。

先生のご専門は、工業計測学、非破壊検査で、なかでもワイヤロープの劣化検査の研究において、実用化に結びつく新しい検査技術を開発されるなど、数多くの業績を残された。

ここに謹んで、哀悼の意を表します。

(工学部)

## 久 堀 寛 文部技官

文部技官 久堀 寛氏は、12月20日逝去された。享年45。

同氏は、昭和42年本学原子炉実験所に就職され、以後水道業務一筋に尽力、永年にわたり原子炉実験所の浄水施設の運転・保守管理業務に多大の貢献をされた。平成2年には京都大学永年勤続者表彰(20年勤続)を受けられた。

ここに謹んで、哀悼の意を表します。

(原子炉実験所)

## 日 誌

(1993年12月1日～12月31日)

12月10日 放射性同位元素等管理委員会

14日 評議会

〳 京都大学後援会助成事業検討委員会

〳 大学院審議会

〳 建築委員会

〳 環境保全委員会

15日 国際交流委員会

15日 国際交流会館委員会

16日 防火委員会

17日 外国人教員及び留学生と本学関係者等との懇親会

20日 総長、職員組合との交渉に出席

22日 附属図書館商議会



留学生のバンブーダンス (12月17日)





